

8 もも

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	16	

(1) 特徴及び吸収特性

ももは他の樹種に比べて成長が早く、早期に結実を始めるが、衰弱するのも早い。しかし**土壌条件が良好な場合**には、収量も多く**経済樹齢も長い**。根をとり囲む根圏の土壌環境の良否が、生育、収量や果実品質などの生産力に大きく影響を与えている。

排水不良地や粘質土壌では生育が不良となる。排水不良の土壌では、透水性を良好にするために開園前に深耕を行う。必要であれば暗きよ、明きよ等を組み合わせて、**排水性の向上**に努める。

(2) 標準的な施肥法

新根の発生・伸長は地温4～10℃から始まり、地上部が休眠中であっても、根は窒素を吸収することができる。また11月から翌年3月までに施肥した場合、施肥時期が遅くなるほど生理落果が多くなる等の悪影響が出る。従って**基肥は11月～12月に施用**する。窒素は年間施肥量の80%を、リン酸とカリは全量を施用する。

しかし、傾斜地や砂質土壌では肥料が流亡しやすいので、3月（雪解け後なるべく早く）に分施する必要がある。基肥窒素量の80%を11～12月に、20%を3月に施用する。

一方、6月まで遅効きすると、新梢の生長が旺盛となり、核割れが助長されやすく、品質も低下する。**9月肥（礼肥）まで窒素は施用しない**。

貯蔵養分を充分蓄え、耐凍性を向上させるため、収穫後9月に礼肥として速効性の窒素肥料を年間施肥量の20%程度施用する。極晩生種では収穫後できるだけ早く施肥する。